

実は凄い学生証

一緒に試験勉強をしている最中、向かいの美園が分厚い本を開いていたので尋ねてみるところ、図書館で借りたとのことだった。内容は彼女の専攻に関するもので、かいつまんで話してくれている間の美園は楽しげに見えた。

「そう言えば、ガイドンスで習っただけで行ったこと無いから、もう本の借り方も覚えてないな」

「そうなんですか。でも、とっても簡単ですよ」

優しく目を細めた美園が、本の内容を語ってくれていた時よりも少し声を弾ませる。

「貸し出しカウンターで学生証を提示するだけですから」

「それだけなんだ」

「はい。学生証のICチップを読み取って貸し出し登録をしてもらうだけでいいんです」

「ああ、そうか。ICチップ入ってるんだっけ」

そもそも学生証を手取ることで自体滅多に無かったので、すっかり忘れていた。

「そうですよ」

美園はそんな僕を見て優しく目を細め、口元を押さえてくすりと笑う。

「今のところこれが役に立った覚えがないなあ」

せつかくなので取り出してみると、確かにICチップが付いている。

「実は多機能なんですよ」

「そうなの？」

「はい。登録が必要ですけど、電子マネーやクレジットカードとしても使えるそうです」

「へえ。便利だね」

素直に感心したが、美園は「でも」と少しだけ眉尻を下げた。

「クレジットカードは銀行のキャッシュカードで事足りますし、電子マネーも外部のものの方が便利なので、利用する人はあんまり多くないようです」

「……まあ、考えてみればそうなるよね」

美園自身も使っていないさそうな口ぶりだったし。

「でも、諸々の電子申請にも使えますし、将来的には出欠の管理にも利用される予定だそうですね」

前半は確かに便利だけど、後半は（サボりたい）学生にとつてはデメリットなのでは？
ただ、楽しそうに語る美園にその発想は全く無いようだ。それに、どう考えても授業には真面目に出ておくべきなのだから、最終的には学生のメリットになる……のかもしれない。

「今はまだ教室側に設備がありませんけど、ポータブル機器の導入も検討されていると説明がありましたね」

「なるほどね。ああ、そう言えば、理学部の研究棟なんかは一部の電子ロックがそんな感じで管理されてるって聞いた覚えがあるよ」

「そうなんです。やっぱり便利ですね」

ふふっと笑った美園が僕と同じように学生証を取り出し、優しい視線を送ってそっと表面をなぞる。羨ましい。

だが、覗き込もうとしたら、学生証をばっと両手で覆った美園が口を尖らせた。

「ダメですよ。入学前の写真なので、ちよっと恥ずかしいですから」

「えー。大丈夫だって」

美園は大学デビューだと聞いているが、写真はきつと可愛い。拒否はされたものの、嫌がっている様子ではないのもう少し粘ってみようか。

「僕のも見せるからさ」

価値が釣り合うとは思っていないが、とりあえず公平感を出してみる。それなのに、美園は「えっ」と目を丸くしてから、「ううん」と迷い始める。なんだか見せてくれそうないきがしてきた。

「ええと……どうぞ」

小さな学生証を、まるで賞状かのように両手で丁寧に差し出してくれる美園。ただ、見たかったはずの小さなカードよりも、頬を朱に染めて瞳を揺らす彼女に視線を奪われた。

「あ、ありがとう」

かろうじて礼を言い、こちらも両手で——指先が少し震えた——受け取り、目の前の美園の引力を必死で振り切って視線を落とす。

入学した期数、学部、学科、学科内での番号を示す学籍番号と、『君岡美園』の文字、そして入学前の美園の写真。

「あの……変じゃ、ないですか？」

変なところなんてあるものか。学生証に使うということ、恐らく入学式用のスーツで撮った写真だろう。

「いや、全然、変なことなんてないよ」

「本当ですか？」

不安そうにおずおずと伺う美園に大きく頷いてみせる。

「普段の美園はこう、何て言うかやわらかい雰囲気だけど、こっちの写真の美園は証明写真だからちょっと引き締まった印象だね。新鮮で、こっちも魅力的だと思うよ」

恐らく今の美園の方が彼女にとつての自然な状態だと思うし、僕の好みとしても今の方がいい。だけど、それでもやはり変だなんてことはない。こういう表情だって美園の魅力の一つだ。

「新しい……写真撮ったのは入学前だけだし、新しい一面を見られたような感じで嬉しいよ。見せてくれてありがとう」

そう伝えると、頬をより濃く色付かせた美園が目を丸くし、何かを言おうとしたのか口を開き、何も言わずに閉じた。

「あ、学生証用だから毛先もまっすぐなんだ」

「……もう、終わりですつ。失礼します」

言うが早いか美園はサツと僕の手から学生証を取り返して、しまおうとしたところで一度視線を学生証に移し、ほんの少し口の端を緩めた。

「次は、牧村先輩の番ですよ？」

「うん。はい」

「ありがとうございます」

先ほどの美園と同じように両手で差し出すと、まだ熱の引かない顔の彼女が丁寧を受け取る。

「……これが、一年半前の牧村先輩」

何故か深呼吸してから学生証に視線と落とした美園が、現在の僕と見比べるように何度も視線を行き来させる。思ったよりも恥ずかしい。

「あんまり変わらないでしょ？」

照れ隠しで尋ねてみると、美園がやわらかく笑って小さく首を振る。少しだけ巻かれた毛先がさらりと揺れた。

「優しい雰囲気は同じですけど、それでもやっぱり随分と違いますよ」

「そうかな？」

「はい。今の牧村先輩は、このお写真の頃よりも大人と言いますか、時間の経過だけじゃなくて、包容力がまず違います。その他にも——」

それから五分ほど幸せな羞恥地獄が続いた。

「あの、美園さん……そろそろ勉強再開しない？」

「あ、そうですね」

はにかんだ美園が時計に目をやり――

「じゃあ、あと五分でまじめます」

満面の笑みを浮かべた。楽しそうで、可愛くて、あと五分耐えることを決めてしまった。